

応募者名	名古屋大学 安田・遠藤・浦田研究室	分野	その他
取組名称	高山市におけるデータ地産地消～大学生と高校生による地域DX～	取組地域	岐阜県高山市

概要	
取組内容	【全体の取組】 ・AIカメラを観光エリアに合計13台設置し、通行量データをオープンデータとして公開（＝データの地産） ・通行量データの分析に基づく飲食店の売上向上やAIを用いた入込観光客予測（＝データの地消） ・産学官民連携「ICTを活用したまちづくりワークショップ」を毎年開催（2021～2024年） 【新たな取組】 ・2023年に飛騨高山高校と連携し、まちづくりの担い手として高校生を育成 ・大学院生が通行量データの分析や活用に関する授業を実施 ・市の施策効果検証ワークショップでは高校生がデータ分析を担当 ・高校生が地域のデジタル活用をサポートする他、11月に「高校生デジタルサロン」を設置
実績や効果	・観光エリアへのAIカメラ設置台数 3台⇒13台 ・2020年に産学官民連携協定を締結 ・大学院生が担当した高校授業：20時限 ・地元事業者向け勉強会やワークショップに高校生が参加した回数：8回 ・学術論文4件、学会発表37件、受賞9件（2020年12月以降） ・参画＆協力団体数：20団体
取組全体を通じて訴えたいポイント	令和4年度冬のDigi田甲子園ベスト8受賞後、地元高校生との連携を開始！ ①AIカメラによる通行量データの収集・公開・活用を継続（データ地産地消） ②高校生がデータサイエンスを実践し、地元の将来を身近に感じる（担い手の育成） ③大学生と高校生の共創による地元事業者のデジタルスキル向上（地域課題解決）

詳細	
地域の課題解決・魅力向上	・行政や観光事業者の効率的な意思決定を行うためのデータ分析と活用を支援 ・都市計画課が実施した「バス駐車制限の実証実験」の効果検証に通行量データを活用 ・地元高校と連携したデータ分析人材およびまちづくりの担い手育成 ・高校生と大学生の連携によるデジタルを活用した地域の課題解決（地域社会DXの推進）
独自性・先進性	・観光エリア13地点にAIカメラを設置し、約4年分の通行量データを蓄積 ・誰でも使えるように市がオープンデータとして公開し、地元事業者が独自に分析・活用中 ・大学院生のもと、高校生が地域課題解決のための実践的なデータサイエンスを学んでいる ・AIを用いた通行量予測の実証実験など、研究結果を地域へ実装
持続性・発展性	・更なるデータの地産地消へ向けて、地元高校生が事業者のデータ分析をサポート ・高校生と取り組み、若者世代が地域の課題に触れることで、地元への愛着や誇りを醸成 ・活動が高校の課外授業に組み込まれたことで、次年度も継続 ・活動が組織化され、令和6年10月「飛騨高山DX推進官民連携プラットフォーム」が設立された
他地域への横展開	・大学生と高校生によるデジタル技術の社会実装は、2024年に愛知県小牧市のデジタルデバйд解消事業にも採用され、10月に大学生と高校生によるデジタル相談会を開催した ・AIカメラを用いた通行量データの収集・活用は、円頓寺商店街（愛知県）でのデータに基づく商店街運営など、他地域にも横展開されている
取組を進めるうえで苦労した点	・デジタル活用に対して不安や心配される声がある中、地域で活動するには関係事業者に対して丁寧な説明が必要になる点 ・高校授業で実施しており、大学生と高校の先生・生徒・市・商店街・施設等との調整に苦労した ・高山市には大学がなく、名古屋大学からも片道2時間半かかるため、訪問できる日数が限られる点
取組の成果を上げることが出来た秘訣・工夫	・商店街理事長や地域住民に対する丁寧な説明の他、勉強会やワークショップを開催することで、住民への理解と協力を促してきた ・活動が続けることを重視し、2019年から継続している点 ・高校との連携によって、将来世代がまちづくりに参画できるようになっただけでなく、授業として実施したことで毎年実施されている

今後の展望	・ 高校生サポートによる勉強会や「高校生デジタルサロン」等を実施し、地域のデジタルスキルを向上することで、デジタルを用いた持続可能な観光まちづくりにつなげていきたい ・ 地元高校生との取り組みを地域に定着させ、産学官民連携によるDXを継続し、高山市における“データの地産地消”の活用事例を創出していきたい
-------	--